

その作品群は無事ですが…2

-The old masters are not lost, but... 2-

3 ジョコンダの暗号

うちに絵を見に来ませんか、と沢田綱吉が言った。

一週間ほど雨と曇天が続いた後の、よく晴れた日の午後のことだった。

雲雀は草壁が作成した分厚い報告書を読むのに飽きていたところだったので、まあ行かなくもないと、放課後ふらりと群れの駆除を済ませたその足で窓から沢田家上がり込んだ。

「……」

ベッドの上には猫が描かれたカードが落とされたかのように置いてあり、そこには『絵はいただいた』と書かれていた。最後の真つ赤なハートマークが凶悪だ。

「すいません、すまません、すみませえんんっ！」

土下座の姿勢を瞬時にとる沢田を無視してカードに手を伸ばす。どんな光に反射したのか、一部分がきらりと光ったように見えた。

「ほんとに何て言ったらいいのか…」

と、平身低頭の沢田の頭上に乗るようにして今度は向こうが透けた立体映像ホログラムの赤ん坊がバレリーナさながらの格好で乗りカードの記載と同じことを告げる。

——よう、ダメツナ。新事実の発見だ、暫く絵を預かることにする。

「……」なにこの余興。

「今朝までちゃんとあつたし、リボンにも言つてあつたんですけど」

雲雀は座り直し、手にしたカードの面の角度を変える。

——よう、ダメツナ。新事実の発見だ、暫く絵を預かることにする。

今度は机の上だ、他に細工がないらしく翳して見ても文言は変わらなかつた。

「？」

沢田は不思議そうに雲雀の手元を見、そうしてふつりと消える立体映像になんだこれ？と呟く。

「包みは残ってるんだ」

「そこがまた凶悪ですよね…」

雲雀の言葉にどんよりと返し、悄気たままにがさごそと古い新聞をかき集める。よほどシヨックだったのか、ふと手を止めたかと思うと外国のタブロイド紙らしい包みを眺め、大きな溜息まで吐く。

「……」

あーあ、とぼつりと漏らす。視線に気付くと「無駄足になっちゃって、ほんとすみません」とまた詫びた。

「とりあえずお茶用意してきますから…」

それには及ばない。携帯電話が着信を伝えるべく校歌をのびやかに斉唱している。副委員長からだった、どこかで乱闘でも起こったのだろう、沢田はごゆっくりとぼそぼそと口にし、ベッドの上に畳んだ包みを置いて出て行った。鞆が肩から降りてないうちに気付いていないようだ。雲雀は耳にしながらその後ろ姿を見送る。しょぼくれた小さな肩に何とも言えないような気分になる、軽い苛立ちと胸に重しでも落ちていくような何から、雲雀に見せられないことに落胆しているのか、それとも預かっている物を赤ん坊に勝手に持ち出されたからここまでべしやんこになっているのか。

「…連絡が来た」

手にした携帯電話が数回震えて沈黙した、滅多にしないメールが届いたらしい。

沢田は振り向くと首を傾げる。

「消えたって」

メール画面を開けば転送された軽薄なイタリア男が謝っているらしい図で、笑っているようにしか見えない表情など携帯電話自体を壊したくなる。

「え？」

「あの子供だよ」

きよとんとさせてから思い出したらしく、ほんとですか、と顔つきを変える。

「傷は大丈夫なんですか？ 話は？ いったいどうしてあんなことに…。巻き込まれたんでしょうか？ 親に連絡がついたとか、…「消えた」？」

雲雀は削除を済ませると腕を組む、沢田は正しく言葉を受け取っている。証拠に、矢継ぎ早に出していた問いを引っ込めて考えるように黙り込んだ。

「入院はしていたけど治療は終わっている」

「…骸が？」病院から？

「分からない」

雲雀たちの読んだとおりに子供に両親はいなかった。親戚までは辿れなかったが、住んでいた場所や身を寄せていた教会などは知れた、ディーノはそこに連絡を取ったらしかった。六道骸などという胡散臭い男と同行する以上、普通の平和的とは言えない何かを背負っているだろうと警察には一切を預けなかった、任せたのは派手な車の方だとディーノは言っていた。

「電話で誰かと連絡を取っていたのは確かみたいだけど」

副委員長が伝えたのはそこまでで、ディーノ本人からは詫びのポーズのアレだけだ、バカにするにも程があるんじゃないのか。役に立たないし、本当にあのひとムカつく。

「……」

沢田はじつと雲雀を見、もう言わなくていいというように首

を横に振った。雲雀は敢えてそれを無視して続ける。

「でも、六道骸だろうね」

相手はなんでだよ、と呟くように言う。くるくる変わる表情も痛いような悲しいようなのばかりになり、六道骸が関わりと俯いてばかりだ。ちつともおもしろくない。

「あいつ、ほんとわっかんねー…」

「本当にね」

雲雀は息を吐く。じゃあ、と窓に行こうとする腕を引く張られているのに気付いた、掴まれた腕と手を離そうとしない沢田とを交互に見た。彼は自分の袖を掴んでるのを分かっているのか。

「これ…」

と、口にしかけた。ヒバリさんに聞きたいことがあります、といささか強張った声が聞こえる、必死みたいだ。相手の身体全体から伝わるオーラにどうしてか心臓が跳ねそうになり、身構えてしまう。

「あの、修復画家って…」

「……」

開いた窓から風が入る、無言で閉めた。ひよつとしていま沢田を殴ってもいいのではないか。だけど出たのは溜息だった。

「言わなかったっけ？」腰を下ろす。

「腕の良い職人としか」

そういえばそうだったと思いつく。

階下から沢田を呼ぶ声がして、沢田はあたふたと転がるように部屋を出て行く、飲み物と菓子袋を手に戻ってきたときに目を合わせる心なしかほっとしたように見えた。

「マフィアAとBの兄弟の妹が結婚したのは修復画家だった」

盆にはソーダに手作りのアイスクリーム。アイスには桃やオレンジが乗っている、サンクランボがあつてパイナップルがない。プリンがなかるうが階下では凄まじい熱戦が繰り広げられていそうなメニューだ。匙を手にとりたくことにする。

「生死不明の状態だ、娘は修道院に預けられたらしい」

国境を越えたところに祖父母がいるそうだからもしかしたら引き取っているかも知れない。いづれにしろ、雲雀の知るころではない。けれどもそんなことを沢田だから気にするのだから、遠い国の、いくつかある悲劇の一つでしかないのに。

「いえ、あの、修復画家が失踪したひとつだってことは話して分かったんです、オレが知らないのはどういうことをするか。えっと、…画家？」

沢田のくせに鋭いことを聞く。修復する専門と描くだけの方とで雲雀は気にせずにしたのだが、副委員長が区別して資料を寄越してきて知ったことだ。修復、習作、偽造、複雑に入り組んでおり、その分野の犯罪の線引きは時代を遡るにつれて曖昧になってくる。

「本職は修復、作品の汚れを取ったり欠損箇所などを補ったり、直す職人だ。絵は描いて飾られたら終わりってわけじゃない」

い。せがまれて絵も描いたらしいけど」趣味は映画鑑賞だそうだよ。

ただの修復家ならこんなに早く素性も掴めなかつただろうが、一点だけ画商が扱ったオリジナルの作品があった、現物も見に行つた。雲雀に絵は分らない、だけど狭い額の中の世界には無数の情報が塗りたくられるのだということは知つた。

しかも趣味が映画鑑賞であつたばかりに不幸な目に遭つたとも言える。失踪する直前までその男は映画を観ている。

「並盛にも修復してゐるのがあるつて言つてましたけど」

「そう。飾つていれば埃が溜まつたりしていくし、褪色する。保存が悪ければ尚更だ、絵は絵でなくなる」

「どんなものでも直せるんですか？」

雲雀から何を引き出したいのか、自分のアイスが溶けるのも気にせず熱心に聞いてくる。そんなに興味を持ったのなら、図書館やら美術館にでも行けばいいと考えながらもまんざらでもない思いが心に満ちてくるのを感じる。

「保存状態や画材にもよるだろうし、焼かれたりしたら別だろうけど、それなりに再現できるとは聞いている」

「画材つてどんなのが……」

「絵なら描いてあるところどこでもだろ。紙や布、木が殆どだろうけど」

つまりは描かれるものは木が材料になつたものが多いということだ。木との相性で石が絵の具として使われるのも話してい

て納得がいく。なるほど染めるのは草で、描くのは石だ、たまには沢田も役に立つ。

「……？ ヒバリさん？」

「別に」

完食して匙を置く。と、窓ガラスを貫いて背後から殺気に似たものが突き刺さる。

——ごっ！

雲雀が避けたのは殺意、ではなく矢状のものだった、ガラスには貫通の穴とそこから放射状のヒビが伸びている。前を向けば沢田が顔面にその衝撃を受け止めていた、丁度持っていたのが匙だけというのは救いだらう。

「む、お……」

沢田は呻きか言語のようなものを発し、顔にへばりついたそれを剥がそうとしている。まるでパイでも受けたかのような暢気な格好だが、受けたら先端が開いて貼り付くなどよく考えたものだ、と雲雀は見ながら感心していた。

「レ、オ、ン……ん？」

赤ん坊の使う便利なカメレオンはきよろりと目を回すとまたその形状を変える、巻物のように横長の筒状に伸びると口から手紙を吐き出した。

「……」

手紙は二人の間にぼとりと落ち、せいせいたという顔でカメレオンがのそのそとハンモックへ進むのを沢田は手紙を手

したまま呆けたように見ている。

「読めば？」

え、あ、は、と返事ともつかない言葉を口にして沢田は慌てて手紙を開く、赤ん坊からだろう、文面の始めには外国語が綴ってあったように見えた。

「すみません、用が出来ました」

視線が下がるにつれて顔色が変わり、沢田は手紙を握り締めたまま立ち上がる。

「理由を」

「あとで」

部屋を出て行こうとする、床を叩くことで止めた。沢田は足を止めて振り返る。

「駄目だ。僕を引き留めておいて、自分は許されるとでも思っているのかい？」

そんなこと、と沢田は言い、口元を結ぶ。握り締めた手は微かに震えてもいるようだ、恐れているのか、焦りか、余裕をなくしたように視線を彷徨わせると、手元を見てやがて俯く。

「リボンが、絵に光線を当てたりするって言うんです」

「…そう」

絵画の鑑定をより深く行うにはそれなりの設備が必要だ、オークションに出品する場合でも鑑定書に信憑性がなければ行われることがある。審査にパスして初めてカタログに掲載されるのだ。ところが、この一、二年ちよつとした異変が起きてい

る。

「ちよつと乱暴なことをするって、オレには価値なんて分らないけど、でも預かったものなんです。そんな、大がかりなこととして、また状態が悪くなったりでもしたら…」獄寺くんに頼んでどうにかイタリアのボンゴレ本部につないでもらわないと。

「それは傷物なの？」

「…傷？」

沢田は雲雀の問いにぼかんとし、ややもしてゆつくりと気まづそうに頷いた。

「オレが、ぶつかって、絵の具が落ちてしまったんです」

「……」

いくらでも謝ります、と沢田はすぐさま重ねた。

「でも、これ以上は。ぶつかっただくらいじゃ落ちないって聞いていたし、凹みくらいにしか見えなかったのに、次に見たら剥がれてびっくりして。ヒバリさんに見せて、知っていることがあったら教えて貰おうかと思って…」

ちよつと泣きそうになっている、相当慌てたに違いない。いまの状態がそれを著実に現している、雲雀が落ち着けと言ったところで冷静になどなれないだろう。沢田がどうこうしたくらいで剥離など、枠に影響するほどの事故かあるいは、水彩画よりも絵の具の粘着が弱かったということか。

「手」

「っ！」

雲雀が身を乗り出すようにして軽く叩くと、不恰好に歪んだ手紙が落ちた。力を入れすぎて手の先が色を失いかけている。

「ところで僕は君がアイスを食べきるのを一度も見えてないんだけど」嫌いなもの？

「ヒバリさん…？」

「バカだね、爪が食い込んでいる」

戒めを解かれて安心したかのように雲雀の手の中で相手の手が体温と色を戻していく、掌には赤い爪の痕が出来ていた。沢田は問うように雲雀の顔を見上げた。

「このところ、オークションに出品される作品に傷が付けられることが多い」

「え？」

「複製だの、巧妙に描かれた贋作だのに印みたいに」

オークションに贋作という言葉に覚えがあるのか、沢田は真つ直ぐに雲雀を見ていた。

「僕はついこの間、聞かされた」

苦い記憶が、蘇る。いや、屈辱と言った方が正しい。

「お兄さん」

「……」

骸は頭の上に乗せた本を持ち上げると黙って横を見る、貸し出された毛布にくるまれて目を輝かせている少年の顔があった。

急拵えのパスポートと身なりはそこに骸の〆弟らしい、どこでもそう見られたし、骸の役目はいつだって面倒見の良いしつかり者の〆兄”だった。

「出る前に食べたばかりでしょう」

「違います」

アラン少年は少年らしい無垢さですぐさま骸の用意した状況に慣れ、自然に〆弟”として振る舞っている、おそらくどこか間違はなく彼の中で骸は親戚の誰某レベルに成り下がっているのだ。

「ロンドンほどのくらいいられますか？」

「三日」相手次第だが長居はしたくない。

陰湿なマフィアに見付かり、アランが撃たれた。奴らの目的は彼が贋作工房から持ち出した何か、だ。絵画かそれを包んだ布きれに間違いない。術はかけられていないし、見たところそこいらのカーテンでも引きちぎってきたようなポロ切れなのだが、何かが隠されているとか特殊な加工でもしてあるのかも知れない、成分は千種と犬に調べさせている。

「みつか…」

アランは骸の返事を繰り返すと膝の上に広げた本の頁を見詰め、不安そうに骸の顔を見る。言わなくても三日では足りない

と表情が訴えていた。

「ウエストミンスターくらいは行きます」

「…国会議事堂」

「ええ。他に時計塔や観覧車やらが載っているのでしょうか？」

アランはこくりと頷き、窓に目を向けた。空と海しかなく、目指す土地はまだ見えない。

骸は本を閉じて荷物の上に置いた。ここでは何もすることがなく、到着まで暇だ。他の乗客達は短い船旅を楽しんでいるようだが、浮かれたバカンスでもないで頭の中では上陸したらと次のプランを漫然と考えたりなどしている。とはいえ、これも計画通りに事が運ぶとも思えない、滞在日数だっという加減だ、二週間になるかもしれないし、半日もいないかもしれない。ちらりと視界の隅に白いものが浮き上がるのが見えた。手だ。

アランの首にはななかゆびくらいの長さの擦過傷がある。治りかけが痒いらしい、安宿の突き出た釘で搔いてしまいい出来たのだが、無意識に手を触れるから治りが遅い。

「……」

いや、おそらく、とても遅い。

撃たれた彼は跳ね馬の手によって病院に入れられていた。

骸は一人になったのを幸いに、調査を始めた。まずは別荘の主だった男のよりくわしい素性、新聞記事、各美術館の修復チームなど、いくつかは当たり籤だったらしく今度は警察にもて

しまった、公共の施設を使う検査はよくない(ありふれたことばかりだというのに)。黒曜ランドが襲撃に遭ったのも聞いた、心当たりがありすぎてその理由は判断できないが、千種とも連絡は取れるし、何よりも誰も死んでいないのでそれは後にする。いくら準備が整ったところで病院からアランを連れ出し、旅に出た。移動は空では分が悪すぎるとして陸路をとっていたのだが、これは船にした。長すぎることもなく、窮屈でもないのがいい。アランにはガイドブックを暇つぶしに持たせてやったのだが、聖書に仕上がったことに後悔した、…そわそわしっぱなしなのである。

「どこか、行きたい場所があるんですか」

骸の言葉を咀嚼するようにアランはじつと窓の外的一点を見ていたが、理解にまで至ると動作は俊敏に、なおかつ行きすぎた。

「ギャラツ…ナ、ナツ…!」

目の色が違う、顔まで明るく高揚感がこちらにも伝わってくるようだ。やや上擦ってつかえる相手の声に被せるように骸は続ける。

「ナシヨナル・ギャラリー」

所在地はロンドン、トラファルガー広場。

西洋絵画のコレクション二千点以上が無料で公開されている。

「…テート・ブリテン」

師匠が、仕事をしたと言っていましたとアランは続ける。ずっと来たかったと、望郷にも似た眼差しでガイドブックの頁を見詰める。

「ギャラリーの保存部門にでもいたんですか」

「わかりません」

きよんとした顔で、疑いようもないほど率直だ。どうも師匠は彼に自分の過去はかいつまんでしか話していないようだ、子供に吹き込めることなど技術の他に何もなかったのだろう。

アランもまた、自身のことについて口数は少なかった、おそらく母親はもう望みはないのだろう、絵は気にするが他はどちらかというと無頓着で、何かを伝えるとしたら空っぽだった教会にだった。届くかも分からないのにシスターにと駅から何度か拙い字を綴った葉書を送った。本来なら連絡など取らせない方がいい、任意とはいえ、骸のしていることは誘拐に近い、警察に餌をばらまくようなもののだが、それでも骸は止めなかった。

「また誰かの手荒い歓迎を受けるかも知れない」

「はい」

アランは会釈でもするように頷く、己が追われる身であること、またその何かを突破しなければどこにも行けないことを理解しているのだ。

「目当ての絵画が展示してあるかどうかは知りませんが」

コレクシヨンのうち、いくつかは他の美術館に貸し出される

し、補修や状態の点検のため引つ込むことがある。大改修の折には総点検と全世界を旅したりと大わらわだったらしい。

「……」

骸の言葉を聞いて、ガイドの字面を追う。ガイドにあるのは一般的に入館者が必要とする最低限の情報だけで、説明だって主な常設展示の作品くらいしかないだろう、アランは身なりを整えてやれば普通の子供で、教育も受けている。…というより、バカではない。

「治りかけの傷を搔かない」

行いそのものは子供だが、どこか骸が気に留めるのはその点だった。

空は雲が多いが、弁当を広げられるくらいには晴れている。

「へー」リボンさんが。

獄寺はそう言うとかけていた眼鏡を外す。集中したいときに彼は眼鏡を使用する、手にしているのは眉唾と言ってはアレだが…まあ、銀河についての、考察がちよつと自由な羽根を広げすぎた感のある解説書だ。彼はユニによく似た少女（そいうや名前を知らない）とその父親に会ってからより深く宇宙の、そして古代の謎にはまり込んでいる。おーばーつってなに？

「ツナ、解けた？」

山本がツナの向かいで顔を上げる。下に敷いたノートの上で

プリントが風に音を立てている。

「あ、まだ…」もうちよい。

ツナは視線を下に戻した。胡座を掻いた横に空の弁当箱、腿の上には広げた教科書で、その斜め前にプリントを広げてある。山本と同じようにノートが下敷き代わりだ。

理科の小テストで成績が悪かった者は間違ったところをやり直してプリントと共に再提出と言われ、昼休みを利用してせせと解き直していたのだ。教科書を使ってもいいし、誰かに聞いてもいい、楽と言えば楽だが、穴埋めくらいいしか写せず、結局は計算だ、獄寺を教師役に二人でやっていった。

「おつま、小数点ちげーよ」

山本の手元を横から獄寺が覗き込んで言う720%ってどんだけだよ。

「できた！」

獄寺は手渡されたプリントを見ると丁寧に合わせてます、合ってます、と頷き、やがて凹む。

「十代目…オレの教え方が悪かったんですね…、グラフのこっちから取るんす…」

「あ、ご、ごめん」直すよ！

ここです、と差し出された箇所を見るとそんなに大きな間違いではない、山本が、オレはどっからだ？というのを獄寺は無視し、これも似ていますが性質が違うので、アルカリ寄りになりますと説明をする。さして難しくないのにほっとしながらも

途中計算をし直すことにする。

「どこだよ、獄寺」

「っせえな…」

ツナが身体を小さくするようにして計算する頭の上で、引つたくるように山本のプリントを奪う獄寺の影が落ちる。日差しの暖かさが、確かに変わってきている。暑いということは太陽に遠いとか近いよりも光の粒子が多めというような感じがいつもする。

獄寺は山本のプリントにも間違いを指摘すると、考えるように膝の上に肘をつき、掌に顎を乗せる。

「やっぱ鑑定っすかねえ…」

「ん？」

山本の応えにおめーじゃねえ、と雑に返すと、ツナと目を合わせる。プリントが終わって一息吐けるが絵の方となると気が重くなる。急に雲が増えて日が陰ののと同じように。

「平気だと良いんだけど…」

どうしても弱気になってしまふのを平気だろ、と山本は視線も上げずにカラリと言いい、獄寺は平気っすよ、と歯を見せて笑ってみせた。

「餅は餅屋というやつです」

「？ どういうこと？」

「より詳しく調べるっつーなら、絵を悪くはしなないと思うんですよ。ボンゴレの資産については俺もよく分かっちゃいません

けど、管理からすれば分野別に専門家を抱えてると思いますし」

「分野別……」

「不動産、美術品、株に利権……ですかね？」

考えるように空を見上げ、雲でも数えるみたいに挙げる。

「美術品なんか細かいっすよ」

ツナはボンゴレにも専属がいるらしいと、絵についても鑑定は一度やったのだと以前にリボンから聞いていたことを伝え、と獄寺は納得したように頷いた、ならより詳しいところまで踏み込めませぬ、と。

「十代目は剥片も気にされてましたから、もしかしたら修復の意味でもリボンさんは持って行かれたのかもしれないし」

「獄寺君も詳しいんだね……」

「そんなことないですよ、うちにもクリムトがあつたからそれで」複製でしたけど。

「……」

「クリムト？」あ、こないだ見たやつか？

間違いの直しを終えたらしい山本が顔を上げる。獄寺にプリントを突き出し、どうだという顔をする。獄寺は面倒そうな顔をしたが一瞥して無言で突っ返す、ヨシということなのだろう。

それを合図かのようにしてチャイムが鳴る。これは予鈴で五分の猶予がある、五分後から英語の授業となる。

「美術館の掲示板にあつたでかいポスターです」

プリントを手にしたまま山本が立ち上がり、少し錆び付いて重くなったドアに向かう、獄寺は制服についた砂を払うツナを振り向いて教えてくれる。どうしてもあの絵を気にしてしまうのを氣遣っているのだ。

「ああ……」

都心にある国立の美術館がこの秋から大々的に行う展覧会の一つに、そのきらきらした絵画を目玉としてポスターにしていた。

「……あの絵に何があるのか知りませんが、十代目の安全を図るためにもリボンさんは持っていったような気がするんですけどね」

「え？」

「オレの想像ですが」

まあよくあるのが暗号が隠されているって話です、と獄寺はわざと冗談でも言うような軽い口調で言ってくれる。いまの自分の精神状態を分かっているらしい、部屋で雲雀が宥めるようにして居てくれたのは大きい、やつぱりハラハラしているのだ。実は歴史的価値がとんでもないものだった、……なんて言われたら鵜呑みしてしまうだろう、盗品という言葉も復活して脳内をぐるぐる回っている。

「どうした？」

何の話だ？と山本が訊くのを預かった絵のこと、と答えると、

小僧はなかなか言ってくれねーからなあ、と同情するように言い、で？と獄寺を向いた。

「絵って、モチーフが暗喩だったりするんで。暗号化されたものが散らばってたりするんすよね」

「小説みたいだね」

それくらいならいい、大きな事でなければ。

「最近、ハマってるもんない、獄寺」宇宙語分かる奴がいたしな。

「しとびっちゃんとか…」

あれは別枠です、と獄寺はきりつと訂正するがその境界線がツナ達にはわからない、山本と二人で顔を見合わせてからちよつと笑った。

「でも凄いやね、宇宙語」

「解説モノは元から好きですし、宇宙語や古代の言語とかロマソツツーか…」

そう言つて獄寺は気持ち前のめりになる。ツナにはさっぱりだが、彼の趣味は力の込めようとか、深くて広いスケールだと思ふといいなとも思う。

「十代目もやりますか？」

「え」

と、階段を下りながらいそいそと胸ポケットから手帳を取り出す。リストがあって、タイトルにぼちぼちと赤丸がついているのもある。中にはリボンからも与えられた本があるらしい、

言語パズルと本人は言っているが絶対にそれ違うだろと思う、

もつと夢のないボンゴレ的な何かだ、隙あらばボス教育というリボンのブレがない理念はいつだって見えない包囲網を形成している。

「ど、どうかなあ？」

決めかねてツナは曖昧に笑う。

「あ、宇宙語の子つて言えば」

廊下を曲がりかけた山本の足が止まり、視線がツナに向けられる。

「こないだ練習の後、見たぜ。薫たちと一緒にだったから声掛けられなかったんだけど」

「何っ？」

獄寺の食いつきがいい、おそらく彼女が同好の士という括りにあるからだろう。

「なんか上見てた」

鳥でも追っかけているみたいだった、と思い出すように続け、獄寺には言ったのに忘れたのかよと、やや気落ちしたように苦笑した。

「聞いてねえ」

「そうか？」

獄寺がちよつとムキになるのを山本はケロリと返す、だけどそういうことにはしておく、という顔だ。

「いい加減に言いやがって」

「うーん…」

この二人も前より変わってきているような気がする、前だったら山本はもつと拘りない顔をしていただろうし、獄寺は喧嘩腰になっていた。

「どうした？ ツナ」

「十代目？」

嬉しいのかな、顔がムズムズするようで、なんだかほつとする。

坂を上がっていくと白い波が砂浜を洗っているのが見えた。

「こんなとこいんのかー？」

部下を従えたディーノがトランクを手に辺りを見回すが辺りは清々しいまでに何もなく、突き出た岩に海鳥が飾り物のようにじっとしているのが見えるだけだ。

「ほんつと置き忘れたみたいだよなあ…」

棧橋に数艘の船が舫つてある。通りには殆ど人影もなく、猫が天下というようにうろうろするばかりで、干されている魚もどうぞと言わんばかりだ。三人も部下を連れてくるディーノの方が目立つくらいだった。

「……」

開店休業といった店の破れたパラソルの下でラジオをつけた

まま老人が居眠りをしていた。穏やかで長閑なのは良いが活気がなく寂しいともいえる。こんな風景が嫌いでは決していないが、放置するといつの間にか思わぬ者に食い物にされてしまうのが現代だ、ここいらもどうかしないと、とディーノは胸の内に思う。

「ほどよく空気も乾燥しててバカンスにはびつたりだな」

リボーンは帽子を軽く持ち上げると言い、ディーノの肩に乗った。

「近代的な施設とはまるで無縁だぜ？」

海沿いの小さな田舎町だ、養殖と漁が盛んな港町に挟まれており、大きな灯台以外は目立って観光する場所もなく誰もが通過するため、ディーノも足を向けない場所だった。海水浴にも適さず、灯台の足下で潮の流れが変わると言われていた。静かで人口も多くないだけに好んで来る者も多いが、いかんせん交通の便や物流、水も良くはないので人が居着くことはなかった。

「そのぶん平和で結構」

「噂は消えねーがな」

「なお都合が良い」

本気で言ってるのかよ、と小さく笑う。

「ワケアリってのばかりを集められてもなあ」

「嘘に隠せば本当が消えるからな」

肩の上に乗ったりリボーンが平坦な声で言った。

「……」

三日前、ボンゴレ本部にやって来た元家庭教師は、何かを調べているらしく、ボンゴレの有する研究施設に籠もった後、ディーノを呼び出してこの場所に案内しろと言ってきた。ディーノは詳しいことを何も聞かされていない、呼ばれたのもツナのことかと思っていたが弟分のことも彼はまだ口にしてはいなかった、慎重に何かを確かめてからとでもいうように。ディーノが知っているのはこの町にリボーンの知己らしい老いた学者がいることだけ。そりゃまた何の用だと訊いたところで答えはなく、荷物を持たされて石灰質の壁に囲まれた場所を歩いている。

「…ジंकホワイト」

「は？」

「色の名前だ、お前知ってるか？」

ディーノは横の壁を見、こんな色か？と指す。

「何でも影響を受けやすい白なんだと」

「影響…？」

「骸がツナに寄越した絵にはそれが大量に使用されていた」

ツナ本人から骸が勝手に預かってくれと絵を渡してきたという話は聞いている。そのときはなんてことない普通の絵で、ツナも気に留めていなかったと思う。しかし、目の前で流血沙汰なんかあってはそれも思えなくなったのだろう。

「ちつとも読み解けやしねえ」

「絵に何かあるってのか」

上がりきったところを左に折れると家が見えてきた。造りはこれまで見ていたのと同じく変わらないが、別荘の趣があり、古びた小屋が寄り添うように建っている。

「ないかも知れねえが、…宝ではあるな」オレには必要でもねえが。

ディーノはリボーンを見、トランクを見る。より判らない。

「丁重に扱えよ」

リボーンはにっこり笑い、肩から下りると小屋に向かって歩き出す。

「お前がぶらさげてるのは名画だからな」

「…名画、ねえ…」

先に着いたリボーンが訪いを告げると中から出たのはエプロンを掛けた職人風の若い男で、黒髪に切れ長の目、アジア系の雰囲気を感じさせていた。ディーノを見るとぺこりと頭を下げ、ロマーリオが不思議そうな顔をして、どうしましょうかねえ、と言った。小屋にぞろぞろ部下を連れて入るわけにはいかない。

「ディーノ」

リボーンは屋敷の方を指し、先に行ってる、と言う。若い男が案内するという、男は同じ年か少し年上というくらいで差し出した手に火傷の痕があった。じいっとディーノを見てから愛想良くどうぞ、と家の門に立って招く。

「管轄外と言っておろうが！」

小屋内から木片を棒状の何かで打つような音がした。

「……」あれが老学者というやつか？

「あれは息子か？」

という濁声が小屋の中から飛んでくる。違うと否定するリボーンの声が聞こえる、耳が遠いらしい。小屋の前を通ったときに老人の姿が見えたが小柄で、見るからに頑固そうな顔をしていた。

「あの家の小僧は…生きてるのか？」

「何人かはいねーな」

涼しくリボーンは答えている、知らんわ、と訊いておいて怒鳴る声にする。男は困ったような顔で笑ってみせる、父はああいう性格なもので。

髪の色も顔つきも似てないなど思うのを先んじて「義理の父です」とくる、そのときに男から塗料のようなつんとする匂いがした。

「不幸なピアノリストの息子だ、あれはいくらかわかっておる。

家を出たのは知っているが、生きているなら寄越してもいいぞ」

「……」

それは獄寺隼人のことか？

トランクを持ち直してディーノは敷石を踏む、庭の何処からか重たく動く歯車の音がする、懐かしいような響きだった。

*

彼の訪問は嵐にも似ている、ような気がする。

ノート類を届けに来たらうじと紅葉が外来のところに並盛中の生徒が来ている、と教えてくれた。野犬に噛まれたらしい、とらうじが怖いなあと体躯に似合わぬことを言い、小さくなる。紅葉は笑い飛ばしたが、アーデルハイトは笑い事ではなく、野犬はやはり問題だと言っていた。二匹いるらしい。別々に行動しているらしいから捕まえる方も手を焼いているのだそうだ、影響してなのか飼い犬でさえ興奮気味になっていたりするらしく、鳥などが被害に遭っている。今日来たのは並盛中の風紀委員よ、と溜息を吐くように言っていた。小学校に次いで、下校途中の並盛中の生徒まで襲うなんて。他校に身を寄せている身とはいえ、肅正委員長として彼女も重く見ている。「まったく、風紀委員長は何をしているのかしら…」

炎真のことがなければ彼女も飛び出していたらう、詫びればいいのか、彼女が無事であることに安心すればいいのかわからない。

そこへ、悪かったねと言わんばかりに窓から登場したのがツナを抱えた並盛中風紀委員長の雲雀恭弥だ。彼らは窓からやってきた、開けてあったのが拙かったのか。

「…じゃあ何考えてたのさ？」

いきなり飛び込んで放つ言葉も謎だ。

誰もがぼかんとするのをきれいに無視し、雲雀は室内を見回すと目的はここじゃないというように首を振り、ドアからすたすたと出て行く。

「……」見送つてしまう。足音が聞こえなくなるまで誰も言葉が出ずに、何だったのだと紅葉が呟いたところにぼつんと取り残されたのがツナだった。

「ツナくん……？」

頬に擦り傷を作っている。赤くなって血も滲んでいた。

「ちよつと、転んで……」決まり悪そうな顔をする。

考え事をして歩いていたら転んで、起き上がったら犬がいたんだ、とツナは言う。

「ヒバリさんはちようどそこに駆けつけてきて、襲われたと思つたらしくて」

こういう結果に、と続けた。らうじはそうかあ、とのんびりと返し、アーデルハイトはいいから手と顔を洗つて来なさい、と窓を閉めながらびしりと言いつける。

「あ」

ばたばたとツナは大急ぎで手を洗いにいき、しばらくして治療されて戻ってきた。曰く、看護師に連れて行かれたとのこと。

「お前の守護者は過保護だな、転んだくらいで」

「犬に襲われたのを勘違いしたからでしょう？」痣になりそうですね。

紅葉が腕を組んで呆れたように言うのをアーデルは静かに返す。

「なんか怖いような顔をしたんだよね、だからすぐには転んだって言えなくて、病院の窓が見えて慌てて転んだんですって言つただけ……」

——じゃあ何考えてたのさ。

「その切り返しがあれかあ……」

炎真は息を吐く、するとツナはしよんぼりと肩を落とした。

アーデルハイトは黙っているが何か言いたそうでもある。発破でもかけたんじゃないかなあとと思う、アーデルは悄気ているひとを見過ごせないタイプでそこが外見以上に姉貴っぽい。

「ツナくん」

呼ばれてツナは目だけで炎真を見上げる。

「えーと……ここは駆け込み寺じゃないよ？」

かくれんぼでオニになって、結局誰も見付けられなかった子供みたいだな、困つたような、落ち込んだような顔が目の前の椅子に座っている。そこをさらに突き落とすつもりはないのだけど、炎真は一応言ってみた。

「リポーンが……戻らなくて……」

「え？」

「だって、だから、問い詰めたい骸本人とも全然連絡取れないし、抱えてらんなくて」

ごめんと詫びるとツナは立ち上がるとする。慌てて止め

た。

「待って！　そういう意味じゃないんだよ、ツナくん」

「……」

アーデルは無言のままツナの顔にある大判の絆創膏を見詰めていた。

「腫れてきたようね、水を貰ってくるから少し冷やしていくといいわ」

「えっ」

驚くツナに座っているよう指示する。

「長くはダメよ、エンマ」

そう言って出て行くアーデルを紅葉たちは見送り、メシまでいいということだ、と頷いてみせた。

「：あれからいろいろあつたみたいだね」

二週間しか経っていないのに、炎真はかなり寝ているような気分になる。ツナはごく控えめに首を振った、肯定するようでも否定するようでもある。

「もうさ、変なんだよ、イタリヤに飛ばされるわ、骸と一緒だった子供が撃たれる場面に鉢会つて、訳も分かんないまま強制的に帰れば即座に検査入院だよ」

「大変だったね……」

「絵のお陰でほんと変なことばっかり」

肩を竦め、大きく溜息を吐く。

「でも検査入院って？　ツナくん平気？　何か病気ででも流行って

いたの？」

「うーん、危なかったから怪我とか？　ヒバリさんも心配されてたし、流行病とかあったのかも」

「……」

氷嚢を手にしたアーデルハイトがドアの前で考えるように立っている。今日のみんなの献立のことかと思っただけだろうじのリックエストでカレーになったはずだ。

「めいっばい血を抜かれたんだよね」 献血かってくらい。

「僕も検査で採血はしたけど……、注射器に二本くらいだったよ」

炎真が言うのをツナはいいなあ、という。血液検査から導ける答えを深く考えていないようだ（炎真もそうだ）、そこをアーデルハイトが指摘する。

「恐らく、その子供はなにかの病を抱えていたのではないかしら。風土病やウイルスといった……」 感染するような。

「『キャリア』って言った……。なんか、オレはなんともなかったけど」

「そう。……沢田氏が不在の間、こちらにも気になるところは調べたわ」

ツナははっと顔を上げ、らうじと紅葉を振り返る。

「最も気にするのは六道骸でしょう」

手渡された氷嚢から滴が落ちた。ツナは手の中で揉むようにしたまま、ただ苦い顔をする。炎真たちを巻き込みたくない

その表情が告げていた。

「あいつ、何も言ってこないんだ。クローム達も何も知らないみたいで…」

「ツナ君はその絵って見たの？」

「見たよ。見たけどよく分からない絵だった」

「どういふのだ？」

「白っぽくて、女の人が描いてあつて…その、絵はわかんないんだけど、外国の人だと思う…」

ほおう、と紅葉は眼鏡の縁を持ち上げる。アーデルハイトの眉がびくりと動いた。

「見ようとしたんだ、実際」

炎真はツナの顔を見て言う。

「え？」

「僕も行ったんだ、実は」

「えっ？」

「だけど、見れなかった」

「え、いつ？」

「先週」

リボンが持つていく前のだ、とツナは呟く。確かに雨で包みが湿気っていくようなのが気になって、包みを剥がして置いておいていた日があった。子供たちにイタズラをしないよう言い含めたが、まるで興味がなかったらしく、獄寺が用意してくれたトラップには自分が引っかけた（絵は無傷）、その

ときに獄寺と山本も絵を見ている。彼らの感想はツナと同じく『へー』で終わりだった、と話した。

「…もし、エンマくんが見ていたならどう思ったかな」

「判らないよ」

炎真は首を横に振る。自分に絵画において特別な何かがあるわけではない。

「ツナくんの部屋に行ったら知らない子が居て」

「うちに？ 女の子？」ハルとか京子ちゃんとか？

ツナが聞くとエンマは黙って首を横に振る。見たことがあるような気がするんだけど、僕にビツクリしちゃったみたいで、と申し訳なく言う。

「もつと、小さい子で…」

「イーピン？」

それも違う、とはつきり言う。その子たちは焼き芋屋さんとかで騒ぎながら外に出て行ったから。

「え…」焼き芋…

「一つ目の角に来ていたんだよね、君のお母さんの手を引いて、そこでお母さんとは会ったんだ」

なんでこの時期に…とツナは呟く、炎真もそう思ったがああときは不思議と疑問に思わなかった。というか、いま炎真が言いたいのはそこじゃない。

「じゃあ誰だ？ トラップは？」

「トラップってどんな？」

ツナは引つかかっただけに言いにくいのか、ちよつとした仕掛けと短く答え、濁すように炎真の話を促す。

「絵って確か、君の部屋に立てかけて置いてあっただろ、じいつと見てた。君はいないし気まずいから帰ることにしたんだ」君を待つていたんじゃないの？

「……」

ツナは黙つてその様子を頭に思い浮かべるようで、うーん、と言つた。ツナの母親は誰でも息子の友人と思つて歓待する、にこやかにごめんさいね、ツナはまだ帰つてないのよ、おやつを持つていくから待つていてねと言つてくれた。そうして部屋に行けば謎の少女、炎真はその横顔と後ろ姿を見ただけだ。薄暗い階段からドアが開いていたことに首を捻り、そして、頭を出しかけて引つ込める。部屋には絵、薄暗くて明かりもなく、少女はそれを見詰めており、炎真に気付くと身を翻すようにして――。

「女の子は出て行っちゃつて、ボンゴレのひとつかと思つたんだけど、違うのかな？ 青いリボンがひらひらしてるのは見たんだけど……」

と炎真はそれ以上続けなかつた。続けられないという方が正しい、……連れ戻されたのだ、ジュリーとアーデルハイトとで安静の名の下に。

「車は知らねえがな」

と、突如知つた声がどこからともなく落ちてきた。

「焼き芋屋はボンゴレだ、獄寺のトラップでママンに何かあったら大変だからな。連れ出すようにした」

「リボン！」

どこからか入つてきてしゅたつと炎真のベッドに降り立つ、ツナの家庭教師である最強のヒットマンはスーツを着た赤ん坊のナリをしている。

「急に帰つてくるなよ！」ビックリするじゃないか。

とかなんとか驚いた顔のままツナは言うが顔どころか、全身に安堵の色が広がるのが見えている。炎真は信頼しているんだなあと思わずにいられない。

「……でも絵はオレ、帰つたときあつたぞ？」

「トラップを無効化させただけだからな」そーやつてツナを騙す必要がある。

「……」

ツナは何にも言えないようで、そうかよ、という顔。

「車？」

アーデルハイトが怪訝な顔をする。リボンの登場は少し目を見開いただけだったが、思い当たることがあるらしい。

「きつと風紀委員だろーな、雲雀に不審車があつたと報告したんだ。覚えてねーか？ 場違いな車がああの辺りをうるついでいたんだが」

リボンの問いに考えもせず頷く。

「……ええ、あつたわね。誰が乗つていたかは知らないけれど」

「アーデル見たの？ 僕、車は知らないけど男の人の声なら聞いたよ」

「車は通りすぎただけだもの、炎真の言う通り二人連れの男もいたわ」

「うろちよろするってアーデルと同じようなこと言うんだ。子供を見なかったかって角のところでおばさん達に聞いてた」そのおばさんも芋目当てに違いない、季節外れの焼き芋屋は盛況のようで沢田家の子供達もなんのかんのとやっていた。

少女が出て行ってしまい、気兼ねしてしまい炎真は、部屋には入らずそのまま玄関に下りて少女の後ろ姿を探そうとした、左の角からはしゃぐ子供たちの声が聞こえている。今出たら沢田家は全くの無人、どうしようと家を見上げていたところに駆けつけてきたのがアーデルハイトとジュリーで、アーデルは問答無用で炎真の腕を引っ張った。

「まさか、こんなところに来ていたなんて。」

「でも、それって関係あること？」

炎真は問う、らうじが首を傾げ、紅葉は腕を組んでは真面目な顔をしているが顔きもしない。

「どうだかな」

リボーンは飄々としている。

「ていうか、リボーン、絵は」

「ねえぞ」

「えええー？ 勝手に持っていくなよ、骸が急に出てきたらど

うするんだよ」

ありません、速やかにお引き取り下さいなんてとても言えないだろう。無理に押しつけられたにしても預けられた以上、……いや、だからこそすぐに返せるようにしておきたいと、ツナなら考えるはずだ。

「お前が死ぬ気で詫びろ」

「何でだよ！」

「そーいや、真新しいような剥離片があったな……」

「……う」

痛いところを突かれたという顔だ。

「ほーら、死ぬ気で骸の相手すりゃ済むことだ」

「ああああああ」俺の命を何だと。

炎真はよかった、と思う。頭を抱えてはいるが、ツナは雲雀に連れてこられてきたときよりもずっと表情が明るい。彼のために出来ることは何だろう、この二人を目の前にするとそんなことを考えてしまう。

「へっちゃらなんだ、アーデル」

「エンマ？」

アーデルハイトは姉か母みたいに心配して病院を抜け出したのを探したり、無茶をさせないようにしよつちゆう釘を刺す。

「僕、友達だからツナくんの力になりたい」

「僕、巻き込まれるとかよりも、大変だけでもっと眩い何かが見えるような気がして、瞬きすら惜しいほど。」

*

こりゃあいい保存状態だわい、と老人は口元を歪ませた。

デイーノはオレのせいじゃないと思うが、謝りたいような気分にはなる。イーゼルに立てかけた絵は老人にその息子、リポーンと鑑賞されるかのように置いてある。

「剥離片がありますね……」

息子はルーペとピンセットを使って丁寧に包みや枠に付いた絵の具の欠片を拾っている、家の一室は太陽光線の一切を遮蔽した造りになっており、どこぞの研究所にも劣らない新旧の機器が唸りをあげていた。すべてが間接照明で、やや暗い。木枠に入った湿度計は一定に保たれ、そこからどちらにもいけないというような表示で外に出しても動くことを思い出すのに時間が掛かりそうな感じだ。

「何かの工房か？」

デイーノは室内を見回す、工作やらが出来そうな机や道具が置いてあるが、材料となりそうなものはどこにもない。

「宝守じや」

老人はまたよたと歩いたが絵を前にすると背筋も伸び、しゃんとした。鋭い眼光は学者そのものと言っても良い。

「大人しくしとれ、小僧」

邪魔と言わんばかりに手を振る。息子につこりと笑顔を向

けられて、自分一人が落ち着かない子供のように思われ、デイーノは仕方なく椅子に座った。

老人はキャンバスの裏側をじっと見詰め、匂いを嗅いでいる。

「製作は1840〜55年といったところか」

リポーンは頷く。表の白がぼろぼろと剥がれて落ちていた、そんな未完成とも言えるような作品なのに二百年前とは、デイーノはぼかんと口を開ける。リポーンが知れたのだから、キャンバスの成分からはじき出されて分かったのだろう、裏側を一見しただけで見破るとは恐れ入る。

「ご丁寧に全体を裏打ちされていて、一回目の鑑定じゃ分からなかった。キャンバスの釘と、元の繊維が混じっているのが見付かって年代が分かった」

「裏打ち？」

デイーノは首を捻る。

「キャンバスを補強するために裏側にもう一枚を接着させることです。戸外で絵を描くことが流行った頃……十九世紀のバルビゾン派までのものなどに見られます。いまは殆どしないのです」

男は静かな口調で説明する、表面に影響する裏打ちを剥がしきる作業など、通常なら一年以上かかるらしい。リポーンはそれを超短期間でやらせたことになる。

「……」

こりやとんでもない名画だな。

デイーノは改めて絵を見、親子を見る。世襲なのかとか、彼らにどんな過去があるのかも知らないが腕利きの『宝守』なのだろう。耳慣れないどころか初めて聞いた言葉だが、ちよつと趣の違う管理人のようなもので、ボンゴレの所有する美術品の価値を下げないために彼らはいるのだと何となく分かる。

「ジंकホワイト、ですな…」

剥離片を集めた容れ物を掲げるようにして男が呟く。リポーンは影響を受けやすい白と言っていた。

「剥離した絵の具はそう古くない、一二年かけての慎重な仕事をしとる。上つ側は全部新しいな、裏打ちもここ二年と言ったところか」

「そうだ」

剥がしおって、と不満そうに老人は言い、手袋をはめると絵の表面を指でなぞる。

「作品状態は下層にほど良好になつとるはずだ。じゃが…意地の悪いのが割り込んだる、わざとニスを変えて…入れたな」

くんと匂いを嗅ぐ。ポケットから眼鏡を取り出すと下方の一点をじつと見る。

「赤外線を当てたら絵が三重くらいになっていた」

デイーノがきよとんとするのを男が赤外線は下絵などを浮き上がらせませす、と教えてくれた。

「下塗りや違うものを上描きすると厚みが出て、絵の具層も乾

燥具合にムラが出たりするんです。この絵にヒビはありませんが、剥離はしている」

どちらも絵にとって好ましくないことなのだろう、デイーノは頷く。下層の状態が良いということは上描きを重ねた結果の運ということなのか。

「X線はどこどころが飛びやがる」

「…ふん」

撫でては裏を見たり身を引いたり近づけたりと何かの手掛かりでも探すように老人は絵を視ている、絵もここまで見詰められれば本望だろう。かたりと背後で音がして、息子が拾った斜め後ろの台で剥離片を拡大して見ているのが分かった。

老人は手袋をはずすと叩き付けるようにして机に置く。

「…術をかけたのは誰だ？」

トーンが違う。濁声がより低く耳を打つ。

デイーノは顔を上げ、老人の顔を見る。むつつりと厳ついは変わらないが、怒りというよりも困惑に硬く強張っているという風に見えた。

「白ぐらいはいくらでも塗れも剥がせもするが、修復などできまいよ」

「父さん」

「よたよたと部屋を後にするのを息子が追う、リポーンは黙って空を仰いでいた。」

「どういうことだよ？ リポーン」

デイノにはすべてがまるで霧の中にいるように分からな
い、すでにボンゴレで精密に調べ尽くした絵を目利きに見せて
どうしようというのだ？ 直すと言っても剥離片、それを付け
足すことで終わるのではないか。臆気に理解できるのは輪郭と
影のみで、掴み損ねた空の手を見詰めるばかりだ。最終手段だっ
ただけだな、とリポーンは呟く、答える気はまだないらしい。

「……」
やれやれだ。

「失礼しました、リポーンさん」

ほどなく息子が戻ってくる。剥離片を残した台を見、イーゼ
ルを見遣ると力なく肩を落とし、

「父や僕には不可能です、すみません」とまず詫びた。

「恐らく、そちらが出した答えと同一の理由です。正解は最下
層の図だろうと父が言っていました。X線の写真を見せていただ
ければわかると思います、意味があるかどうかは……」

「ああ、そーだな」

リポーンはあつさり頷くと、悪かったな、と言った。息子は
首を横に振る、感謝したいくらいですよ、とも続けた。

「ただ、ジंकホワイトの効果が」

父は笑いました、と。そこが大事というように。

「高温多湿の日本は作品にとってラッキーだったと」

久しぶりに工房に籠もりそうです、と、救いであるかのよう
に穏やかな眼差しを絵に向けた。

*

炎真が週末にでも来られたら来て欲しいと言付けてきた。伝
えてくれたのはらうじで、別に困っている様子でもなかったか
ら急に何かが起こったというのでもなさそうだったが、ツナは
チャイムが鳴ると同時に学校を飛び出していった。

「廊下は走らない！」

「すみません！」

気が急いで病院にたどり着くまで何人もの人にぶつかつた、
バスターミナルの辺りでは人の流れに逆らっていたというものも
ある。ベビーカーに突進し、犬に吠えられ、自転車に引かれそ
うになりと、これで大怪我でもしたら洒落にならない。

「あの！」

ノックもせずにドアを開ければ炎真はトマトを口に運んだと
ころだった。ぼかんとツナを見る。

「ツ、ツナくん……」

食事の時間だ、悪いことをした。

「ご、ごめん」

炎真は急いで食事を掻き込むと（二度咽せた）、トレーを横
に置く。見れば、炎真のベッド回りは用紙や本で囲まれ、スク
ラップブックにスケッチブックまで窓辺に立てかけてある。

「……」

アーデルたちと、と炎真は肩を竦める、暇だったし、こういうのはいいって。

「昔のこと、覚えてないかと思っていただけけど、思い出さなかっただけで、僕にもツナくんの役に立てることあったんだなって思ったよ」

「エンマ…」

炎真はにこりと笑うと近くの椅子を示した。

「座って」

その前に言わなきゃいけない。

「ありがとう、怪我してるのにいっぱい頼っちゃって…ごめん」

自分の恥ずかしさを知った、怪我を負った友人にぼやいて心配させてはこんなことまでさせて、非道いにもほどがある。

「勉強よりもずっといいよ。ジュリーは面白がってひよいひよい見付けてきて、アーデルなんか僕より張り切ってたし…ツナくん？」

「あつ、ノド乾いてない？ お茶かジュース買ってくるよ」

まともに炎真の顔を見ることが出来なかった、恥ずかしいのと嬉しいのと泣きそうなのと感情はめちゃくちゃで、鞆を掴み、逃げるように病室を出た。顔を洗おう、褒められるよりも嬉しいってなんだ、ていうか、すごく反省した。だから売店でジュースを買って炎真が調べてくれたことをちゃんと聞かなくちゃ。

「わっ」

——ドシンッ！

と、心を決めたところでまた人にぶつかると、間が悪い。「すみません」いたた…。

これで何人目だよ、と思いつながらぶつかった弾みで落ちてしまった相手の鞆を拾う。見回したが他に荷物は飛んでないようだった、被害が少ないことに息を吐く。会社帰りといった感じの男の人で、黒っぽいレインコートを着ている。また雨？

「ああ、ありがとう」

鞆を受け取ると相手は、確認することもツナの顔も見ようともせずそそくさとして行ってしまう。

「……」

急いでいるのかな。

ツナは鞆をかけ直し、売店に向かう。レジで支払いをしていて仕舞い込んでいる指輪が反応しているのに気付いた。何かあったのかとこっそり訊いたがナッツは何かを訴えようとしてすぐに引つ込んでしまった。不思議に思っ、戻って炎真に見せると指輪は何事もなかったように沈黙し、ナッツは嬉しそうに炎真にすり寄って廊下の足音一つですぐに元に戻ってしまった。

「なんだったのかな？」

炎真はくすりと笑う。

遊んで欲しいんだと思うけど、臆病だからなあ、とツナは頭を掻く。リボンが言うにはナッツはツナと同じようにのんび

り屋で、気を抜いていると敵にも気付けないほど鈍い子ども、であるらしい(失礼な)。遅れて炎真の気配に気付き尻尾を振ったというところだろう。

「そういえばツナくん、ちょうどニュースで企画されている美術展のことやってただけだ」

言われてパツクジュースを強く握り直し、ツナは姿勢を正す。

「規模が大きいよ。五年掛けて世界を回るんだって」

「五年間も?」

「古代王国の遺産だって言ってた」

獄寺くんが好きそうだなと思う、伝説の都市の宝、かつてあったとされる場所からの出土品はわかるけれど、ツナは素朴な疑問を持っている。

「古代とか、昔のものってどうやって本物だって決めるんだろ?」

「ああ、鑑定?」

炎真は出た場所はもちろん、付着物や科学的な分析方法で調べたり、過去の文献と照合したりするみたいだよ、とさらにと答える。

「絵の場合はね、所定の鑑定人が鑑定するんだ。これは遺族や研究をしているとか絵画の専門家で、資料やカタログなんかを参考にしたりする、赤外線とかX線を通したりしてサインだったり、成分、画法なんかをチェックするんだ」

「へえ:」

ああ、X線。太陽光線の直射もよくないという絵画に、その他の光線がいいだろうはずないことくらいツナは理解している(美術館見学のときのあのプリントで)。

「昔のものは習作だったり、模写だったりするからね」

「詳しいね」

みんなのお陰、とはにかむように炎真は笑顔を作る。わいわいとシモンファミリーでやったのだろう、なんかいいなあと思う。家を壊すような争いもなさそうところが。

「鑑定する人は直したりもするの?」

「専門家ではあるけど全員が画家ってわけでもないから、:まあ研究所なんかは鑑定から修復までするみたいだけど。それに、修復家も汚れたり、破けたりした作品を直す人だから、勝手が違うっていうか、鑑定は:しないんじゃないかなあ:。科学的な機材とか必要っていうし」

炎真は大きな美術館は特定のチームとかあつて鑑定と保存や修復の部門を分けているから、と分厚い本を開いて教えてくれる。いろいろと調べてくれたようだ。

「父さんの友達に修復家さんがいたんだ。もともと物静かな人だったけど、作品についての解釈とかかむつかしいことは言ったことなかったんだよね。例えば時代背景とか、モチーフの意味とか、それは持っていて越したことはない知識だけど個人的な意見であつて、語るのが仕事ではない、自分たちの仕事は作

品の状態を見、オリジナルを殺さないで、そのままに留めるやり方を探し出して施すことなんだって」

修復画家とは、雲雀が話した通り本当に職人だ、教えて貰って改めて思う。そこまでするのに鑑定はしないのは不思議な気がしないではない。

「違うの？」

「うん」

炎真は頷くと、頼まれればするんだろうけど、と考えるように言う。と目的が違うから、と続けた。

「扱うのは真筆か複製らしいから必要ないんじゃないかな」

「しんぴつ？」

「本物のこと、複製は模写とかコピーしたもの」

コピーが複製というのなら、贋作の括りは何だ、ツナはわからなくなる。

「遺跡から出たものは復元するくらいでしか直せないけどさ、絵は直せるんだ。欠けたりした絵の具の部分はどうしようって、考えるんだって。層の厚みや絵の具の乾き、タッチを見て資料と睨めつつしながら絵の具や溶剤を選んで、直す」

炎真は布団の画面に点でも打つように手を動かして話す。思わずツナの目線も見えない絵にいく。

「ようざい…」

作業は普通の画家よりももしかしたら大変かもしれない。「それで、直しましたよってことを分かるようにするんだ」

「分からないようにするんじゃないか？」

「全体を見たらきれいになるけど、よく見たら違うって、ここはオリジナルじゃないって見るひとに報せておかなきゃいけないんだって。他にも何か言っていたけど、やり方とか技術がどうとか…」

「ヘタクソがやったら目も当てられねえしな」

「だよね」

ふいに聞こえてきた声に頷いてから炎真はあれ？という顔でツナを見る。室内の空調と思われる正方形の穴ががこんと開いてするすると降りてきたのはリボンだ、いつの間になつたんだそれ。

「ちやおっす」

「や、やあ…」

声にいささかの驚きはあるが炎真は普通にに応じて、リボンの突飛さに慣れかかっている。リボンはとことことツナのところをやつてくると腕を組んだ。

「ディーノが家で待つてんのに大した弟子だな」

「え？」ディーノさんが？

「結果がはつきり出たぞ、本物だ」

「本物？ なんの」

惚けているつもりなどないのに骸の絵だ！と鮮やかな足蹴りが右頬に入った。ぐはっ。

「はつきりはしたが、匙を投げられた」

「だってあれから、何もしてないし、やっぱりぶつかつたのが……？」

「そんなヤワじゃねーよ、トリポーンは窓の棧に足を組んで座るとぴつと炎真の手に写真を投げ寄せた。」

「……」

「光線とか…、あ！　うちに来たつていう謎の女の子！」

「無理だ」

これも容赦ない、今度は左頬だ。

「時間をかけてやったようだからな、『意地は悪いが、悪意はない』んだそうだ」

そういうのを質が悪いっていうんじゃないのか。

鑑定したのは、そこいら専門の爺さんとその弟子つてやつだ、

とトリポーンは言う。炎真は写真に目を落とすまままだ、表情がちよつと険しくなっている。

「エンマ？」

「これ、知ってる」

でもどうしてだと問うような眼差しを向けてくる。

「有名な作品だったの?!」

身を乗り出してツナの腕を取ると写真とともに真剣な顔を向ける。

「ツナくん、落ち着いて。作品は大きな美術館にあるはずだから、これは類似品というか…、習作なんかの類だと思う。だけど美術的価値は高いはずだよ」

写真には絵とは違うものが、まるでフィルムを重ね合わせたように浮かび上がっていた。炎真がこれだと指ししてくれる。

「これが赤外線写真なんだけど…女の人が同じポーズをしているけど、水と、花と、わかる？」

写真を横にして炎真がなぞつたとおりに慎重に見ていけばツナにも分かる、水中に浮くように女の人が横たわっている図だ、風車のある風景と山並み、不自然な形の蝶が飛んで、日傘と被さっているけれど。

「修復は出来ない」

トリポーンは言う。

「えっ？」

「……」

ツナはぼんやりとトリポーンを見て、写真を見る。写された絵は何も語ろうとせず、ツナの頭の中みたくにただ複雑にいくつかの線と点が絡まったものが焼きつけてあるばかりだった。